

グローバリゼーションと雇用労働の変化(上)

田端博邦 東京大学名誉教授

*本稿は二〇一〇年一一月三〇日に明治大学で開講された「労働講座企画委員会寄附講座（代表：高橋均・労働者福祉中央協議会事務局長）『未来の自分をつかめ—先輩たちの働き方から学ぶ』」での田端博邦さんの講義を再構成してまとめたものである。同講座の概要は本誌一七四〇号、青野恵美子「大学における労働教育～労働講座の実践から学ぶこと」を参照されたい。

一 はじめに

講義のテーマは「グローバリゼーションと雇用労働の変化」です。いま日本では非正規雇用問題だけでなく、正規雇用を含めて様々な厳しい問題が起きています。そうした現実の背景にあるものは何なのかということを、グローバリゼーションという視点からお話ししたいと思います。

今話題の労働者派遣法改正問題を具体例としてあげてみましょう。おそらく多くの方が新聞などで知っていると思います。派遣法改正に関しては、こういう意見が非常に強く出されています。つまり、「派遣労働の規制をいま以上に強化すると、日本の企業は海外に出ていかざるを得なくなるのではないか、だから派遣規制の強化には反対だ」というものです。主に企業や経済界からはこうした意見が強く出されていま

こうした意見の中には、詳しく述べますと二つの点が含まれています。

一つは、日本の賃金水準は国際的に高い水準にある。したがって日本の企業が国内で生産を続けてグローバルに競争をするためには、生産コスト、労働コストを可能な限り低くしなければならない、そのためには派遣労働のようなフレキシブルな労働、フレキシブルな雇用を活用しなければならない、ということです。もう

一つは、そういう日本の企業にとって、現在日本の国内で行なっている生産活動は、日本以外の国でもできるということです。したがって、

外国でも行なうことのできる生産活動であれば、日本と外国を比較して、賃金水準が低い外国に出ていくほかないということになります。もつとも、アジア諸国などと比較すると、現在の日本の賃金水準は相当高い水準にありますので、それではなぜ、様々な製造業の生産活動が日本国内で行なわれているのかということも問題として残ります。実は、企業の生産コストは賃金だけではありません。また、国内で生産を続ける理由には、生産コストだけではなく、それ以外の問題もあるのです。しかし、こうした込み入った問題は当面捨象しておくことにします。

一般的に、企業の目的は「利潤を最大にする」と定義されています。おそらくある経済学の流派を通じて、この定義は共通していると思います。そういう企業の本来の目

的からしますと、このような主張は理解できません。いわけではありません。むしろよく理解できるといったほうがいいかも知れません。日本の企業だとしても、日本国内で生産をつづけ、国内の雇用を維持するということは、必ずしも企業にとっての優先的な目標ではないのです。

それでは、そうした企業の目的からすれば、派遣労働などの非正規雇用によって低い賃金で人を働くことはやむをえない、日本の国内の雇用を維持するためには、様々な非正規雇用の形態や劣悪な労働条件もやむをえない、ということになるのでしょうか。いま私たちが考えなければならない問題です。

他方で、派遣を規制すべきだという議論は、つぎのように主張します。ネットカフエ難民といふ言葉も生まれましたが、「派遣労働者の賃金は非常に低い、まともに生活がおくれないような賃金水準の雇用は許されない。このようないくつかんとした生活をおくるようなものでなければならぬ」という考え方があります。

派遣労働者のみならず、パートや請負、有期雇用といつたいたいわゆる非正規雇用の賃金は、いわゆる正規雇用（といつても様々なものがありますが）の賃金と比べると相対的に非常に低い水準になっています。ヨーロッパでは均等待遇という原則が基本にありますので、日本ほど低賃金ではないのですが、日本では均等待遇とい

う考え方自体が確立していないためにそうなっているのです。正規雇用の半分ぐらいいの賃金水準ではないかと言われていますが、ある経済学者の方は三分の一くらいと言っています。私もその程度ではないか思っています。いずれにしても、扶養を受け家計補助的に働いているパートのような人をどう考えるかという問題はあります。雇用労働によって一人ひとりが生活を立てているという前提で議論すると、雇用労働者の三分の一ぐらいの非正規雇用労働者は非常に低い生活水準に甘んじているということになります。日本の平均的な社会生活は正規雇用賃金の水準を基準に形成されてきたと考えれば、その二分の一や三分の一では、まともな生活ができないというのは当然のことです。

それでも、こういう状態を放置しておいてよいのだろうか。国際競争のために賃金コストを抑制する必要がある、引き下げる必要があるというようなことであれば、どこまで下げていけるのだろうということにもなります。

では、企業の低賃金雇用の必要性といふものと、働く人の生活の必要性というものをどのように両立させることができるのでしょうか。結論を先取りしますと、この二つの問題といふのは両立しないのです。企業は、生産コスト、労働コストを低くできなければいけないのか

う考え方自体が確立していないためにそうなつて現時点では正解は存在していないと思いません。この問題は、おそらくないのです。そしてこの問題は、これからしばらくの間かなり大きな問題になり続けるでしょう。この問題を社会的にどう考えて、どう解決していくのかということは、みなさん自身の問題になります。ですからぜひ、みんなで自身の頭で考えていただきたいと思います。

周りの人たちがこう考えているからとか、あるいは世間一般でこう言っているから、新聞やテレビでこう解説されているからということでも納得していただきたくないとは私は考えています。研究をしたり、調べたり、いろいろ考えることはなかなか大変な面もありますが、しかし、実は非常に面白いことなのです。ぜひ、自分自身で納得できるまで考えてほしいと思います。

二 グローバリゼーションとはなにか
「グローバリゼーション」という言葉はよく

性もあるということになります。

では、みなさんはどうしたらしいと考えますか。非常に難しい問題ですが、ここにはグローバリゼーションが雇用問題に与える影響のもつとも重要な問題が、象徴的に表されていると聞いていいと思います。

使われているのですが、そもそも、グローバリゼーションとはなんだろうということから考えてみましょう。

これは、実は、よくわかつてゐるようで余りよくわからぬ、そういうものではないかと思ひます。よく言われるものは、カネ・ヒト・モノが自由に国境を越えて動き回るということです。しかし、カネ・ヒト・モノが国境を越えて移動するのがグローバリゼーションだという「グローバリゼーション」と言われる前の時代は、カネ・ヒト・モノが動かなかつたのだろうかという疑問がすぐに生じます。「グローバリゼーション」という言葉が頻繁に使われるようになつたのは、一九八〇年代の半ばくらいからではないかとされていますが、おそらくそのあたりの時代になにか大きな変化があつたのでしょうか。以下の講義でもいくつかの点を断片的に述べることはできますが、「グローバリゼーションとはなにか」「なぜ、グローバリゼーションが生じたのか」「グローバリゼーションは、どこに向かうのか」といった点についてはみなさんが自身でこれからも考えていただきたいと思います。

私の考え方では、これからますます世界はグローバリゼーションの時代に入つていくと思います。グローバリゼーションの動きはおそらく逆転せず、経済活動はますますグローバルになつていくと思います。もちろん、これについていろいろ言わなければならないのですが、

割愛します。

ただ、講義の都合上整理しますと、グローバリゼーションにはいろいろ見方があります。二つのある種極端な見方から説明すると、一つは、「グローバルでない社会の想定」、二つは、「グローバルで生きることをめざす人たちが少しずつですが生まれています。しかし、それは例外的なことであつて、普通の人は自給自足だけ生きることはできません。おそらく国のレベルで見ても、純然たる自給自足経済の国になるということは不可能でしょう。一国内部で生産と消費を完結させるような経済はとても想定できないのです。いま、私たちが身につけている衣料品はほとんど中国製ですし、食料自給率は四〇パーセント程度です。インターネットのグーグルやヤフーはアメリカを本拠とするグローバル企業ですし、マクドナルドやウォーレマートのような多国籍企業が日本の生活に深く入り込んでいます。また、後でもふれることになりますが、日本の自動車や電機産業は、グローバルな市場に展開をしていて、輸出のウエイトもかなり高くなっています。生産と消費の両面で、日本の経済や生活は、グローバルな世界に組み込まれているといつてよいでしょう。

みなさんも実感していることと思いますが、そうした経済のグローバル化は近年ますます強まっています。そのような点からしますと、たしかにグローバリゼーションは経済の発展の必然的な結果であるといえるように見えます。問題は、それをそのまま受け入れなければならぬかどうかという点にあります。

あるところで証券会社の寄附講座の「金融のグローバリゼーション」という講義のレジメを見たことがあります。そこにはこうあります。そこで、「企業はグローバルな企業にならなければならぬ」「学生のみなさんはグローバルに活躍できる人材にならなければならぬ」「投資家はグローバルな視点をもつた投資家にならなければならない」「学生のみなさんはグローバルに活躍できる人材にならなければならぬ」と。ここには、非常にプラクティカルに現状をそのまま肯定して、それに適応しようとする考え方が示されています。おそらく現実主義的には無難な考え方かも知れません。あまり損をしないためには、そうしたほうがいいと多くの人が考へるかも知れません。

少し具体的な例を挙げておきましょう。一つは、「一九八五年にG5（プラザ合意）」があつて、急激な円高になつた時期の事例です。為替レートが二三五円から一五〇円くらいになり、一年半ぐらいの間に倍以上の円高になりました。たしか資生堂ではなかつたかと思ひますが、このような円高になると、日本で生産して輸出してはとてもアメリカでは売れない、そこでア

メリカにも製造拠点をつくるという記事がある雑誌に載ったのです。日本の工場とアメリカの工場の両方で生産する。そうすると為替レートがどう変動しても、両方でうまく調整すれば為替変動の不利益を被ることはないだろうというのが会社の考え方だというわけです。今では当たり前のことと思う人が多いかもしませんが、私は、最初これを読んで非常に驚きました。日本の企業が、日本企業でありながらアメリカ企業でもあるということになつてくるからです。これは、企業の生産活動がグローバル化したということを意味します。

現在は、工業製品だけではなくて、サービスも含めて同じようになっています。外国の大きな銀行などの金融機関を「外国人投資家」といいます。東京証券取引所では、そうした外国人投資家が日本の株をかなり買っています。たしか、ある時期には外国人投資家が最大のシェアを占める時期もあったように記憶しています。このように、日本の経済システムそのものが日本の国内で完結をしてはいいのが現実です。これがグローバリゼーションというものです。これからもこういう動きがどんどん進むでしょう。だから先ほど述べた証券会社の寄附講座のように、「学生はみんな英語を勉強して、グローバルな人材になるように努力しないと駄目ですよ」というような議論がされることになります。

ネオリベラルなグローバリゼーション

しかし、グローバリゼーションについては、

もう一つのペシミスティック（悲観的）な見方も有力です。『世界を不幸にしたグローバリズムの正体』という翻訳の本があります。翻訳書の書名はちょっととどぎつすぎると思いますが、ノーベル経済学賞を受けたジョセフ・スティグリツという人が書いたもので、原題をそのまま訳すと「グローバリゼーションとその不満」というもので、ごく真面目な内容の本です。このあとに、やはりややどぎつい訳書名の『世界に格差をバラ撒いたグローバリズムを正す』（直訳では「グローバリゼーションを機能させる」という本が訳されていますが、どちらもグローバリゼーションの問題を考えるうえでは参考になります。

ステイグリツは、この本で、貿易や資本取引の自由化がIMFや世界銀行、アメリカ財務省などによって推進され、その基本的な考え方が市場原理主義的なワシントン・コンセンサスにあると述べています。グローバリゼーションは、アメリカやその金融機関の利益を実現するために推進されてきたものであって、決して中立的なものではないこと、そうしたグローバリゼーションによって、途上国などとの格差が拡大したということを述べています。つまり、ステイグリツのような考え方をとれば、グローバリゼーションは、単なる自然的な経済発展の

帰結であるというものではないし、また、世界の人々の生活を向上させるものでもないということになります。

ステイグリツは「国際的な金融コミュニティ」という言葉を使っていますが、金融の国際取引をすることによって、利益を受ける諸機関あるいは人々のコミュニティ（集団）です。こういう人たちの利害がグローバリゼーションを推し進めています。

貿易の自由化についても、典型的に、自然発生的にグローバリゼーションが進んでいるわけではないです。戦後長い間、今日まで、貿易自由化交渉が続けられてきたことはみなさんもよくご存知のとおりです。アメリカがグローバリゼーションの本拠地だというのが通説ですが、アメリカという国も八〇年代から九〇年代を見ると、国内では保護主義的な要求がすごく強いのです。労働組合が保護主義的な強い要求を持つていますし、アメリカの議会は、しばしば保護主義的なスタンスで望んでいます。実は、関税を低めるとか、非関税障壁をなくすなどという貿易の自由化を推し進めてきた力というのは、グローバルな多国籍企業なのです。

一口にグローバリゼーションと言いますが、グローバリゼーションは単にモノ・カネ・ヒトが自由に移動するというような問題ではなくて、自由に動くようなシステムが人為的に作られてきているということが肝心な点です。世界的に八〇年代以降、国境のバリアを越えて世界

中をモノとカネが自由に行き交えるようにしようというネオリベラル（新自由主義）の市場原理主義的な考え方が世界に広まりました。自由化の動きは、もちろんそれ以前からのものですが、この時期になると自由化の範囲と程度はどちらも急速に深化し、自由市場的なグローバリゼーションといってよいようなものが実現することになります。今日のグローバリゼーションは、なかば人為的に自由主義的な枠組みを発展させたという意味で、ネオリベラル・グローバリゼーションと呼んでもいいのではないかと思っています。地球大で生産や交易あるいは人の交流が広がるという意味でグローバリゼーション一般なるものを想定しようとすれば、それは必ずしも今日のグローバリゼーションと一致するというものではないかもしれないと考えています。あとでもふれることになると思いますが、今日のそれとは異なる、より良いグローバリゼーションを求めるべきだという考え方も強いのです。

グローバリゼーションで進む格差

このような批判的な観点から見ますと、様々な問題が見えてきます。

最近のBPの海底油田の事故を取り上げてみましょう。地球環境にとって安全性が一〇〇%でないような開発によって、石油メジャーによる一種の乱開発と言つていいでしょうか、大きく自然を汚染するということが起きています。

中をモノとカネが自由に行き交えるようにしようというネオリベラル（新自由主義）の市場原理主義的な考え方が世界に広まりました。自由化の動きは、もちろんそれ以前からのものですが、この時期になると自由化の範囲と程度はどちらも急速に深化し、自由市場的なグローバリゼーションといってよいようなものが実現することになります。今日のグローバリゼーションは、なかば人為的に自由主義的な枠組みを発展させたという意味で、ネオリベラル・グローバリゼーションと呼んでもいいのではないかと思っています。地球大で生産や交易あるいは人の交流が広がるという意味でグローバリゼーション一般なるものを想定しようとすれば、それは必ずしも今日のグローバリゼーションと一致するというものではないかもしれないと考えています。あとでもふれることになると思いますが、今日のそれとは異なる、より良いグローバリゼーションを求めるべきだという考え方も強いのです。

こうした事故に限りませんが、ネオリベラルな市場は、一般に、環境そのものを保全するといふインセンティブを内蔵していないのです。
途上国の問題もあります。グローバリゼーションが進む世界のなかで最貧困グループといわれる国々がありますが、サハラ砂漠以南の地域では食べるものが十分ではないという飢餓状態が慢性化しています。最貧困では、食料が絶対的に不足すると、健康状態の悪化から免疫力が低下し、伝染病の猛威にさらされます。乳児死亡率が高いのもそのためです。初等教育さえ十分でない地域もあります。こういう世界の貧困問題について、現在のネオリベラル・グローバリゼーションは解決する方向には働いていません。八〇年代、九〇年代以降、そういう国への産業や公共インフラ整備のための投資額は相対的に減っています。グローバルな世界が実現すると、ゆくゆくは豊かな国と貧しい国との所得は均等化して、ハッピーになるんだ。だから自由市場にしましよう、という議論がありますが、現在のグローバリゼーションはそういう結果を生んでいません。むしろこういう貧困地域については状況が悪化しています。金融危機後、さらに、ひどい状況になつてているという話も多いのです。

こうした貧困の問題は、貧しい国が貧しくなるというだけかというと、そうではありません。先進国内部でも、グローバリゼーションの過程で非常に大きな問題が発生してしまいました。

こうした事故に限りませんが、ネオリベラルな市場は、一般に、環境そのものを保全するといふインセンティブを内蔵していないのです。

最初に話した非正規雇用もその一つですが、先進国の多くの国で八〇年代、九〇年代に失業率が上がりました。失業率が高まると同時に非正規雇用の割合も増大しています。

その結果として、先進国地域の富の総体は拡大しているのですが、勤労者・雇用労働者の所得は、ほとんどの国であまり伸びていません。ひどい時期には低下しています。日本もここ一〇年ぐらい、雇用労働者の平均所得は低下していますと言われています。非正規雇用が増えれば当然なりますし、正規雇用の賃金も停滞し労働条件も悪化してきます。先進国の中でもアメリカはとくにひどいのではないでしょうか。労働時間もずいぶん延びてきたと言われています。

日本では、リーマンショック後、製造業で生産を半減させたので、公式統計では労働時間が減っているかもしれません。そういう時期を除きますと、二〇一二年間ぐらいのグローバリゼーションの時代になつてからは日本の労働時間はほぼ横ばいです。しかし、サービス残業などを含む実労働時間でみると、相当の長時間労働が続いているます。経済規模そのものは少しづつ大きくなつてはいますが、賃金所得は増えています。

このようにグローバリゼーションは最貧困の人たちだけを苦しめるのではなくて、先進国の人たちも苦しめているという状況にあるのです。先進国の企業は、実は儲かっているところが

多くて、大企業の内部留保は膨らんでいます。

日本企業の内部留保は二〇〇兆円ぐらいあるんでしょうか。アメリカでは年俸何億円とか十数億円という報酬をもらっている役員・幹部社員の例があるように、グローバリゼーションの過程で先進国の中でも所得分配の不平等が進んできています。

このように見ますと、実はグローバリゼーションの時代というのは、モノやカネが世界中を飛び回るようになったという話ではなく（それでも確かに）、先進国・新興国・途上国・最貧国間の格差が拡大し、それぞれの国の内部の所得格差も拡大したという点で、国内的・国際的な不平等化が進んだ時代、あるいは進んでいる時代ということができます。みなさんもご承知のように、ここ数年、グローバリゼーション反対の運動が国際的にかなり盛んになっています。グローバリゼーションのあり方を変えなければいけないという議論が、国際的な様々な機関などでも真剣に議論されているのは、そのためです。

まとめますと、現在、グローバリゼーションの過程が急速に進み、将来的にも進むであろうということですが、これにどう対処するのかということについては、二つの考え方があるということです。

一つは、とにかく実利的に対応する方策を考えようというものであり、もう一つはグローバリゼーションのあり方そのものを、なんらかの

形で再検討して、よりよいグローバリゼーションのあり方を見出していくというものです。

以下の、私の講義では後者の考え方で私の意見をお話することになります。

グローバリゼーションの二つの顔

その前に、グローバリゼーション反対論について、私は単純に反対するだけでは済まないと考えていますので、少し予備的な話をしてもおこうと思います。

Tシャツの製造過程を考えてみます。日本の国内でデザインして発注し、実際には中国で製造するTシャツが一番一般的なものでしょう。そうしたTシャツづくりの過程を最初のところから考えると、おそらく綿花を育てるところから始まるでしょう。ボタンを作ったり、針を作ったり、プリントしたりという工程も必要です。中国でTシャツを作れば完成したものを日本に持ってきて販売しますから、輸送もしなければなりません。製造の工程で使われる機械も膨大な工程を経て作られます。

私たちが買って身につけている一〇〇〇円ぐらいで気軽に買ったTシャツが、出来上がるまでは、おそらく数え上げることができないくらい膨大な種類の労働が積み重なっているのです。それこそ、もし糸や布から自分ひとりでつくると考えたら、一着のTシャツをつくるためには途方もない労力を要すること想像することができます。私たちはいまモノが溢れるよう

これだけは知っておきたい労働法11

成果主義時代の ワークルール

道幸哲也 著

[北海道大学教授] 定価(本体1800円+税)

過酷な競争、サービス残業、賃金の低下、
ストレス・過労死……。“ルール無視”が
蔓延する時代にあって、人間らしく、自分
らしく働くための労働法の知識を提供。

第1章	まず、労働法を知る
第2章	自分らしく働く
第3章	プライバシーを守る
第4章	権利を主張する
第5章	労働条件を維持・確保する
第6章	働き続ける

旬報社 〒112-0015 東京都文京区目白台2丁目14番13号
TEL 03-3943-9911 FAX 03-3943-8396

E-Mail
info@junposha.co.jp

な世界で生活していますが、もろもろ身につけているもの、家に置いているもの、すべてをそういうふうに考えますと、とてつもない多数の労働の上に私たちの生活は成り立っているということがわかります。

お金さえあればなんでも買えるんだというふうに言つた人がいましたが、お金をそのままブラックボックスのような奇術の箱のなかに入れて、瞬時にTシャツが出てくるというものではありません。現物のTシャツはそれを作る人々の労働がなければできないのです。みなさん、ぜひ、私たち自身の生活が実は非常にたくさんの人たちの労働、雇用の上に成立しているということを考えてもらいたいと思います。したがつて、私たちが今のような生活をしていることができるとするなら、これは多くの人たちの労働の恩恵を受けているということでもあるのです。となれば、そういう人たちの労働がどういうものなのか、そういう人たちはどういう生活をしているのだろうか、ということも時々は考えてもらいたいと思うのです。

インドの綿花でTシャツが作られているなら、インド、中国、日本と複雑で膨大な工程が国境を越えてつながつていています。私たちの生活はそういう意味で、グローバルな人々の労働の上に成立しているということになります。貿易をしたり、取引をする際には、そこでお金の動きが発生しますから、金融システムに従事する人たちの労働ももちろん関係する中

です。

Tシャツは「グローバルな協業の成果である」ということ。それが、ここでのキーワードです。最近私たちが目にするのは、企業がいかにグローバルに活躍しているかとか、グローバル競争でどうなのかという話ばかりですが、実はグローバリゼーションというのは、世界的な人々の協業がつなぎ合わされて私たちの生活が成り立つような社会になつていているということなのです。

しかし、そういう世界的な協業システムを媒介あるいはマネージしているのは資本主義的な企業です。企業は最初に言いましたように利潤動機で活動しているということになりますので、利潤動機で活動している企業に担われている協業システムもまた全体としては、資本主義的経済システムによって担われているということになります。

グローバリゼーションは、一面で人々が助け合うシステムですが、他面でそういう人々の労働のあり方とか生活のあり方をよくしようということを、それ自体としては目的としていないシステムであり、資本主義的システムによつて支えられています。ここから多様ないろいろな問題が起きてくることになります。（一七四六号につづく）

（たばた ひろくに）